In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	芥川龍之介文庫の明治期実録本：『開明奇談写真之仇討』『女盗賊峯の邦松』など
Author	奥野, 久美子
Citation	文学史研究. 56 巻, p.159-167.
Issue Date	2016-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

（『文学史研究』56号　2016. 3）

芥川龍之介文庫の明治期実録本
―『開明奇談写真之仇討』『女盗賊峯の邦松』など―

奥野　久美子

一、はじめに

日本近代文学館の芥川龍之介文庫は、芥川の旧蔵書を収め、作品研究その他のために活用されており、『芥川龍之介文庫目録』（昭五二・七　日本近代文学館）がそのリストである。芥川が種本にしたとされる洋書、和漢書も多い中で、あまり注目されることはないが、明治期、主に明治一〇年代にさかんに刊行されていた類の、実録体の本がいくつか収められている。また、明治期の講談本もわずかながら収められている。これまで、いくつかの拙論で大正期文学における講談本の影響や、講談と関係の深い実録類に注目してきたので、今後芥川文庫の実録類にも注目していきたいと考えている。本稿ではそのごく一端に触れたいと思う。言及する本が芥川作品の種本であるといった指摘ができるわけではないのだが、なぜそれらの類の本が芥川文庫にあるのか、つまり、芥川が何の目的でそれらの実録類を手に取ったのかを推察し、作品に何らかの間接的影響があったかもしれないという可能性を以下で提示してみたい。

芥川文庫の実録類の中で『女盗賊峯の邦松』（上・下〔芥川文庫本は合冊〕裏辻斧麿編輯、野田与三治郎出版〔奥付次ページ広告より開成社発兌〕、明一三・九、『芥川龍之介文庫目録』29ページ[1]）に関しては、拙文（『芥川龍之介ハンドブック』（平二七・四　鼎書房）の項目「偸盗」）においてわずかに言及したことがある。芥川文庫にある講談速記本『郭公若葉の青山』（邑井一講演、酒井昇造速記、明二七・一二　やまと新聞社〔七分冊、やまと新聞付録〕）とともに、「偸盗」（大六・四、七）のヒロイン沙金の悪女像に影響した可能性を述べたものである。明治前期刊行の実録の類には女賊、姦婦、夫殺しなどの所謂毒婦が登場することが多く、そういった読み物が芥川の造型する悪女にも多少なりとも流れ込んでいる可能性はある。

また、明治前期に活字で流布した実録類は、物語内容は江戸期に書かれたものであり、時代設定もほとんどのものは江戸時代である。しかし明治になってからの風俗を取り入れ、幕末と明治をまたぐ時代設定の物語や、明治になってからの物語も多くある[2]。そういった、幕末

から開化期にかけての物語も、いくつか芥川文庫に存在する。それらは、芥川が開化期ものを書くために参照した可能性もあるのではないだろうか。

以下、その『女盗賊峯の邦松』、また幕末から開化期を舞台とした『開明奇談写真之仇討』（前・後編二冊、五明楼玉輔口演、伊東橋塘〔専三〕編輯、明一七・六　滑稽堂〔後篇奥付〕『芥川龍之介文庫目録』29ページ）、そして、実録というべきではないかもしれないが、同じく幕末から開化期ものの『人情美談／日本気質』（前・後編、芥川文庫には後編のみ現存、山崎杲平編輯兼発行、明二二・三〔後編奥付〕『芥川龍之介文庫目録』35ページ）の三つの実録類について、考察する。特に『開明奇談写真之仇討』を中心に考察したいが、次節ではまず先掲『芥川龍之介ハンドブック』にて言及済みの『女盗賊峯の邦松』について述べる。

二、『女盗賊峯の邦松』

『女盗賊峯の邦松』（以下『峯の邦松』、書誌は前節のとおり）はもともと上下二分冊であったものを、芥川文庫本では合冊にしている。上巻は第壹回から第五回、下巻は第六回から第十回で、本文は各26ページである。武家の娘が女賊に身を落とし悪行の限りを尽し、最後は捕手に斬られるという、実録にありがちなストーリーである。なお、本書の明治十七年六月刊行版が国立国会図書館に所蔵され、同館のデジタルコレクションで見られるが、こちらは新たに明治十七年の序文が付されたもので、明治十三年版とは本文も違い、各回ごとに付けられた題も、意味する内容は概ね同じなのだが表現が異なっている。本稿で言及する『峯の邦松』は芥川文庫蔵の明治十三年版[3]を指すものとし、それにしたがい、以下に簡単に梗概を記す。

高知城下、二百石の武士山谷平八郎には、国松（姉、上巻では「国松」と表記）、達次郎（弟）の二子がいた。国松は並びなき「婀娜（あだ）もの」として評判が高く、小厮（下男）の見代吉など多くの男から言い寄られるがうなづくことなく、生まれついて怜悧な娘であった。しかし手癖が悪く、困り果てた両親に家内の小座敷に押し込められる。城下で佐幕派と勤王派が対立し、父平八郎は佐幕派に連座して流刑に。見代吉は謹慎中の国松に代筆の艶書をわたし、ついに思いを遂げる。小座敷から出された国松は、東森清之進という富家に嫁ぐが、年の離れた夫を嫌い、見代吉と駆落ちする。無一文の二人は金満家から三十両と衣類を盗んだのを手始めに、白髪山にこもって追いはぎ、松山へ移ってまた追いはぎ、豪家への押し入りなどを繰返す。宇和島から、野根山という人里はなれた山中に入って暮らすようになる。

一方、秋田藩の深江新蔵という美男の武士は、武者修行に出て十七の歳に佐賀に至る。剣の腕がよく、君公からもてなしを受けたが、男色を迫られ出奔、長崎丸山の娼妓となじみ、金が尽きたことから悪心がおこり（ここまでが第五回上巻）、老人と二人の童を殺して五十両を奪ったのを始めとして、追いはぎなどを繰返しつつ野根山に至る。茶店で、この山には強盗が住み追いはぎをすると聞き、新蔵は力だめしにと、一人深い山中に入っていく。山中で二十歳あまりの美女に出会った新蔵は、女の営む茅屋に泊まることに。そこには五人ばかりの

男達がいて、女が帰ると伏し拝む。新蔵は、女盗賊とその手下たちだとにらむ。翌朝、女は新蔵に自分は邦松という女盗賊、大将の男は見代吉、あとは手下だと明かす。新蔵は自分も白浪稼業だと明かす。邦松が美男の新蔵に惹かれて味方に引き入れたと察した見代吉は、ある日、遠方の豪家へ盗みに入ると言って手下を連れて出かけ、途中で自分だけ引き返す。邦松と新蔵は枕を並べており、見代吉は斬りかかるが、逆に新蔵に喉を突かれて死ぬ。新蔵と邦松は夫婦の如くになる。邦松は、自分の父が君公から賜った錦の風呂敷を、実家に忍び入って盗み出す。売り払うと五百両になったがすぐに使い果たし、野根山へ帰った。邦松と新蔵は手下たちに、各自で財宝を奪って再びこの地へ集まろうと言い、二人で各地で暴虐を尽す。あるとき、薩摩の村田新八が高知に来て君公に拝し尊皇をすすめ、君公から大金や銘刀を賜った。新八の宿にそれらを盗みに入った邦松と新蔵。新蔵は新八に短銃で撃たれて死に、逃げ延びた邦松も、捕手につかまり斬られた。

このような筋である。なお序文では邦松を高知藩の無双の女盗賊とし、「鬼神お松」「牙のお才」「三島お仙」「女熊坂」といった女賊に比している。

この物語を芥川が読んでいたとしてすぐに連想される芥川作品が、先掲『芥川龍之介ハンドブック』の拙文にて触れたように、「偸盗」であり、そのヒロインの毒婦沙金である。先の拙文では項目執筆という制約上、詳しく述べる紙幅がなかったため、ここで触れておきたい。まず、美しい容姿を持ち、盗賊の頭として多くの男たちを手下として使い、悪行を繰返すのは邦松も沙金も同じである。また、邦松は駆落ちした見代吉という伴侶がありながら、美男の新蔵に心を移し、嫉妬した見代吉は新蔵に斬りかかって殺される。一方の沙金は、同じ盗賊仲間の中で、太郎、次郎兄弟の両方と通じ、太郎を罠にはめて殺そうと、次郎にもちかける。「あの女が、痘痕のある、隻眼の、醜い己を、日にこそ焼けてゐるが目鼻立ちの整つた、若い弟に見かへるのは、元より何の不思議もない。」（「偸盗」三）[4] と、容姿に自信のない太郎が、美男の次郎に嫉妬している様子も描かれており、結末は大きく異なるものの、美しき女賊をめぐって二人の男が殺し合う構図も同じである。

「偸盗」を芥川自身は失敗作とみなし、大正六年三月二十九日の松岡譲宛書簡では「「偸盗」なんぞヒドイもんだよ安い絵草紙みたいなもんだ」と自嘲している。「偸盗」の主な材源は「今昔物語集」で[5]、中に女賊の物語もあり、それらが直接的な素材であることは疑いない。しかしまた、『峯の邦松』が芥川文庫にあり、芥川が参看したであろうことを考えれば、まさに「安い絵草紙」のようなこの実録本が、「偸盗」や沙金の造型に流れ込んでいる可能性もあるだろう。

なお、「偸盗」には次のような次郎と沙金との会話がある。

「内心女夜叉さね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足下の石を拾つて、向ふへ投げた。

「そりや、女夜叉かも知れないわ。唯、こんな女夜叉に惚れられたのが、あなたの因果だわね。――まだ疑つてゐるの。ぢや妾、もう知らないからいゝ。」（四）

「内心女夜叉」はむろん「外面如菩薩内心如夜叉」という華厳経を出典とする表現をふまえているが、「如夜叉」ではなく「女夜叉」との表記は、森正人「《偸盗》の構図―六道の辻の女菩薩と女夜叉―」（熊

本大学「文学部論叢」平二・三）が指摘するように、誤用ではあるが本作以前にも複数の先例があり、[6] 芥川が「女菩薩」の語を多用することからも、意図的な用字であるとみていいだろう。その「外面如菩薩内心如夜叉」の語は、実録や講談での毒婦の表現にもよく用いられている。芥川は古典文学はもちろん、実録の類からも「外面如菩薩内心如夜叉」という毒婦の形容に接していたのではないだろうか。次節では、その「外面如菩薩内心如夜叉」の語を含む実録『開明奇談写真之仇討』について考察する。

三、『開明奇談写真之仇討』

『開明奇談写真之仇討』のあらすじは以下の通りである。

天保期、江戸両替町の仕出屋で評判の美人娘、お絹は神田お玉が池の医師松木彦三郎に嫁入りする。やがて一子彦之丞が生まれる。安政二年、[7] 十七歳の彦之丞は勝麟太郎の遣米使節に加わり渡米、約十年間の予定で西洋医術を学ぶことになる。息子を送り出した彦三郎は、出入りの小間物屋の娘、お蔦を妾にし、家を空けがちになる。寂しいお絹は新入りの下男伝次（実は長崎生まれの霞小僧と呼ばれた悪漢）と密通。二人は彦三郎を殺そうと、致死量の鴉片を酒に混ぜ彦三郎の帰りを待つ。彦三郎の弟子の源庵がこの様子を見ていた。身ごもったお蔦のもとから帰った彦三郎は、源庵の留守に毒酒を飲まされて死ぬが、病死とされた。妾のお蔦は失意の中、女の子（お糸）を出産して死ぬ。源庵に毒殺の秘密を知られていたと知ったお絹・伝次は、源庵を闇討ちしようとして失敗、出奔する。源庵も二人の復讐を怖れて逃走。松木家は無人となる。伝次らは上州で絹商いに成功、長崎屋与市として店を構えるが、二人は彦三郎の亡霊に苦しめられる。お絹はそのたたりか、春菊にあたって死亡する。

慶応三年、十三年ぶりに帰国した彦之丞は神戸に上陸、難波新地で芸妓をしている義妹お糸に会う。彦之丞が米国から父母へ送った写真をお糸が持っており、異母兄妹とわかったのである。彦之丞はお糸の祖父から父の死と母・伝次・源庵の出奔を聞く。さらに恩人の森川と訪れた箱根で、長崎屋与市の神経病を治し、米国仕込みの写真の腕前を披露、与市を写す。その後偶然源庵と再会した彦之丞は、源庵から父の死、母の出奔の真実を聞く。彦之丞が持っていた写真を源庵が見て、与市こそ伝次であるとわかる。敵を討ちたいが世は既に仇討ち禁止の時代。彦之丞は与市の前で写真の与市を刺して仇討の代わりとした。しかし与市は口止めのため彦之丞と源庵をピストルで殺そうとするが失敗、恥じて自害する。

この、前編後編各十回、全二十回の実録『開明奇談写真之仇討』[8]（芥川文庫蔵本の書誌は本稿第一節に記載）については、中込重明「落語「写真の仇討」をめぐって」（「日本文学論叢」平五・三）において、落語「写真の仇討」との関係や、写真を刺すというモチーフの由来が検証されている。本作の作者表記は確かに落語家の五明樓玉輔による口演とされ（ただし、文体は口演調ではなく完全に実録体である）、写真を刺すというモチーフは共通している。中込氏は落語の「写真の仇討」と、本作『開明奇談写真之仇討』は別話であるが、全

く無関係というわけでもなく、「大津絵にも唄われたという「開明奇談写真廼仇討」の大衆的な人気、ないしは知名度に便乗」し、落語のほうを「写真の仇討」と命名した、少なくとも混用された経緯はあったのではないか、としている。成立過程についてはこの中込氏の論が委細を尽している。

なお本作を「写真の仇討」の題で収める『近世実録全書』第二十巻（大八・二　早稲田大学出版部）における巻頭の解説には「原題は『開明奇談写真之仇討』と称し、五明樓玉輔の落語によつて伊東橋塘の綴り、明治十九年に出版されしもの」とある。明治十九年というのは、この『近世実録全書』の底本がそうであったのかもしれないが、確認できる最も早い版は芥川文庫にもある明治十七年六月の滑稽堂版である。その後書肆を変えていくつかの版がみられ、国立国会図書館をはじめ複数の図書館に収められている。形態も、滑稽堂版は和装本であるが、明治十九年十月の闇化堂版（大阪府立大学蔵本を確認）はボール表紙本であるなど異なっている。

ちなみに『開明奇談写真之仇討』での毒婦はもちろんお絹で、前節で言及した「外面如菩薩内面如夜叉」は第七回冒頭でお絹について述べる中で「たとへ外面ハ菩薩の如きも女ハ内心夜刃（やしや）〔ママ〕なりと浮屠氏（ほとけ）ハ已に説れし如く」とある。

先掲の中込氏論にもあるように、『開明奇談写真之仇討』と題する本は、刊行年や形態の違いがあっても、中身の本文内容はどれもほぼ同じである。別に、物語の大筋は同じであるがタイトルを変え、人物名や細かな筋に違いのある異本としては、『写真仇討／木鼠の清吉』（講談叢書第十四編、大四・一一、大五・五　第四版、岡村書店）がある。蛇足ではあるが、この異本にも少し触れておきたい。こちらは、さきほどの『開明奇談写真之仇討』のあらすじと比較すると、人名がお絹→お金、松木彦三郎→杉本善良、彦之丞→善之助、お蔦→お梅、源庵→升庵、霞小僧伝次（変名、長崎屋与市）→木鼠の清吉（変名、下総屋金兵衛）、お糸→お碌、と全く入れ替わっている。また、細部の設定では、清吉とお金が杉本善良を殺す毒薬は、鴉片ではなくモルヒネである。しかしもともと『開明奇談写真之仇討』を安易に改変した作であるためか、『写真仇討／木鼠の清吉』58ページで升庵がお金と清吉に、善良殺しのことを知っている、と告げる場面で、升庵のセリフに「下手でもヘボでも医者の目には、鴉片を盛った中毒性」とあり、うっかりモルヒネを鴉片に戻してしまっている。筋の細かな違いとしては、さらに、お金の死も春菊の毒に当たったのではなく、清吉がモルヒネを春菊に盛って殺したことになっている。後半で清吉がピストルで善之助と升庵を殺そうとする場面でも、『開明奇談写真之仇討』のほうでは伝次が恥じて自害するが、木鼠の清吉はそのまま逃げ、追ってきた升庵を撃ち殺してさらに逃げた末に捕縛されている。肝心の写真を刺す場面でも、『開明奇談写真之仇討』では彦之丞が、仇討禁止の世の中になったことや、母の悪名を世に広めたくないという思いから、伝次の目の前でその写真を刺して仇討とする。一方の『写真仇討／木鼠の清吉』では、升庵をも殺害した清吉が捕縛されてから、仇討をするかどうか、となったとき、善之助は「仇討の意志がない、意志がないのではない、復讐の心は燃えてゐるけれど、神の教へを守る彼には人に刃を加へるだけの勇気蛮気がなかつたのである」と、妹のお碌が仇討したいと希望して、善之助が写真を取り出し、お

碌が写真の清吉を突き刺す、となっている。このように、アメリカへ留学した善之助が、「神の教へ」つまりキリスト教の教えから仇討を拒否したり、また、善良やお金の霊におびえる清吉を「神経衰弱」と形容したりするなど、『写真仇討／木鼠の清吉』には、開化も既に落着いて久しい大正期らしいアレンジがみられる。

さらなる蛇足ではあるが、正岡容が大正十五年三月に「苦楽」に発表した短篇小説「文明開化／写真の仇討」という作品がある。落語や講談に通じていた正岡容のことであるから、もちろん落語や実録の〈写真の仇討〉をふまえてのタイトルであるが、これは全くの別話で、かつて愛し合い、心中までした男女が五年後に偶然再会すると、女は無骨な薩摩の侍あがりの役人から無理矢理求婚され、妻となっていた。二人は密通し、臆面もなく写真館に二人の写真が飾られている。それを知った女の夫は、二人を斬り殺し、写真館の硝子写真も粉々にする。しかし何度やっても翌日には写真は元通りになっており、写真の中の二人はどんどん大きくなってゆく。やがて夫はアメリカの水兵に殺され、屋敷も焼けてしまう。焼け跡には例の写真がちらばっていた、というもの。いわば写真が仇討する形である。

さて『開明奇談写真之仇討』に戻り、この本が芥川文庫にあることの意味について考えたい。梗概を見て、また〈開明奇談〉というタイトルからも思い浮かぶのが芥川の「開化の殺人」（大七・七）である。故北畠ドクトル（仮名）の遺書という形式の小説で、北畠は、いとこである本多子爵夫人（明子）を少年時から愛していた。しかし北畠が医学の勉強のため三年間イギリス留学をしている間に明子は銀行頭取の満村恭平に嫁していた。明子の幸せを願う北畠であったが、満村が禽獣に等しい悪漢であると知り、その殺害を計画、観劇帰りの満村に血色が悪いと丸薬をすすめ、病死に見せかけ毒殺した。明子はやがて本多子爵と再婚。子爵にまで殺意を抱く自分を怖れた北畠は、自らあの丸薬を服して死ぬ決意をするという筋である。

『開明奇談写真之仇討』との共通点は、家業の医学修行のための洋行、じゃまな夫を病死にみせかけ毒殺、という二点であり、そして「開化の殺人」では『傀儡師』（大八・一　新潮社）所収時の改稿によって加えられるものではあるが、写真という開化期アイテムである。「開化の殺人」は初出では遺書の本文だけであったものが、『傀儡師』所収時に冒頭に「下に掲げるのは」以下の文章が加えられ、その遺書が「予」が最近本多子爵から借覧したものだという旨のいわば序文が付けられた。その序文の中に、「北庭筑波が撮影した写真を見ると、北畠ドクトルは英吉利風の頬髯を蓄へた、容貌魁偉な紳士である。」と、写真で北畠の風貌を確認する描写がある。また、「開化の殺人」の関連草稿とされる草稿[2]（『芥川龍之介資料集』平五・一一　山梨県立文学館）には、「芸者の写真が三枚」、というものがキーアイテムとして登場する。

『開明奇談写真之仇討』では、松木家が医師の家であり、また伝次も長崎の医師の倅であることから薬の調合に詳しく、鴉片で彦三郎を病死に見せかけて殺害した。「開化の殺人」でも、北畠はやはり医師であるゆえに満村を病死に見せかけて殺すことができた。この、北畠が医師であるという設定について、小谷氏の論（注（9）に同じ）では、原稿の修正痕から、「主人公の渡英の目的は最初は「法律の学」を学ぶことと書かれており、あとから「法律医学」と改められ、「法

律」も消されて「家業たる医学」となっている。」として、芥川は医師による毒殺という重要なプロットを、最初は固めておらず、ここを書きながら決めたことになると指摘している。

実際に「開化の殺人」執筆時に芥川は「中央公論に探偵小説を書く約束をしたのでいやいやへんなものを書いてゐる」「探偵小説のつもりで書いてゐても探偵小説でなくなりさうなのだ」（大七・六・一九松岡譲あて書簡）と吐露しており、書きあぐねていた様子がうかがえる。その芥川が、『開明奇談写真之仇討』をヒントに医師による毒殺などを設定したという推測も、あながち無理ではないであろう。

四、『人情美談／日本気質』

最後に、同じく開化期ものにかかわる芥川文庫蔵本『人情美談／日本気質』（書肆は第一節に記載、以下『日本気質』）について触れておきたい。前編が第一回から第十一回、後編が第十二回から第二十二回という構成である。芥川文庫には後編のみ所蔵されている。梗概は以下である。

嘉永年間、江戸の六千石の旗本、神保六太夫と妻のお鹿の間にはいまだ子がない。六太夫はおよしという妾を抱え、およしは懐妊するが、その直後に本妻お鹿も懐妊。およしは男子六輔を挙げるが、お鹿の産んだ女子は数日で死亡。お鹿はおよし母子を毒殺しようとするが、気付いた六太夫が、およしを六輔もろとも知人の呉服商越前屋平兵衛の妻子となし、お鹿の恨みは解ける。六輔は平兵衛を実の父と信じて育つ。やがて六太夫は偶然の喧嘩から水戸藩士大岡正治に斬られる。六輔が十四の歳、六太夫の甥で、六輔には実の従兄にあたる本多金一から、実の父が旗本の神保六太夫であること、六太夫は大岡正治に斬られたことを聞かされる。六輔は父の仇討のため剣術を稽古する。慶応四年、本多金一は伏見の戦いで死亡。大岡が彰義隊に入ったと知った六輔は、自分も入隊する（以上前編）。

宇千木一三と変名して彰義隊に入った六輔は、大岡を討とうとするがかわされる。事情を聞けば、喧嘩から六太夫を斬った経緯は、大岡のほうに分があった。しかし大岡は、いずれ六輔に討たれるつもりだが今は別れようと言って六輔と別れる。五月十五日、雨降りしきる中、官軍が上野忍ヶ丘の彰義隊を攻める。傷を負った大岡は、自ら願って六輔に討たれるが、最期に生き別れた妹に自分のことを伝えてほしいと遺言する。五稜郭まで戦った六輔は明治の世になると徳川家に従い静岡へ移住、書店を開く。静岡の廓で一目ぼれした花妓、薄紫は、大岡の妹、お玉だった。二人は夫婦となり一子三次郎も生まれるがお玉は病死。六輔は三次郎を連れ東京へ。そこでかつて妹と思っていたが実は血縁のないお愛と再会、二人は夫婦となり大団円。

ちなみにこの実録でも、やはり六輔の実母、お鹿が妾を毒殺しようとする場面で、「外面如菩薩内心如夜叉」の語が使われている（前編17ページ）。

このあらすじから連想する芥川作品は、やはり開化期ものの「お富の貞操」（大一一・五）である。「お富の貞操」は慶応四年＝明治元年五月十四日、上野彰義隊戦争の前日、雨降りしきる中で上野の小間物

店の女中お富と乞食の新公とのあいだにおこった出来事と、それから二十年あまりを経て、立身出世した姿の新公を、お富が家族と共に見かけてあの日のことを思い出す場面を描いている。

この小説を書く際に芥川は上野戦争時の上野の市井の様子を調べており、大正十一年三月三十一日塚本八洲（義弟）あての書簡で、「どうか下の三項につき御祖母様に伺つた上二三日中に御返事をして下さい／（一）明治元年五月十四日（上野戦争の前日）はやはり雨天だつたでせうか／（二）雨天でないにしてもあの時分は雨降りつづきだつたやうに書いてありますが、上野界隈の町人たちが田舎の方へ落ちるのにはどう云ふ服装をしてゐたでせう？」などと三項目にわたって細かな質問をして、最後に「かう云ふ点が判然しないと来月の小説にとりかゝれないのです」と書いている。

『日本気質』では後編（第十二回～第二十二回）の第十二回から第十九回の冒頭部分までを、彰義隊と上野戦争の描写にあてており、芥川が「お富の貞操」のために多数読んだ資料のうちの一つとして本書があった可能性がある。彰義隊関係の記述がほとんどない前編が芥川文庫に所蔵されていないことも、そう考えれば納得がゆく。もっとも本書には町人が避難する描写は皆無で、雨であったということの確認以外にはほとんど参考にならなかったであろうと思われる。なお「お富の貞操」の草稿（『芥川龍之介資料集』先掲）では日付が五月二十四日と誤記されている。

五、おわりに

以上、芥川文庫に所蔵される実録類のうちから三点を取り上げ、芥川作品とのかかわりを推測した。確実なことが言えたわけではないが、芥川文庫の中でもあまり注目されることのない実録類も、理由があって芥川の手に取られたのだ、ということをあらためて考えてみる契機にはなるのではないだろうか。今後も、まだ数多い芥川文庫の実録類に注目していきたいと考えている。

（1）文庫目録は出版者を「野田与三二郎」とするが、奥付では上下巻とも「野田與三治郎」であり、「与三二郎」は誤記か。芥川文庫本の上巻奥付は明治十三年九月二十一日出版御届、二十六日刻成出版。下巻奥付は明治十三年九月二十日出版御届、二十六日刻成出版となっている。

（2）『近世実録全書』（早稲田大学出版部　大六～昭四）は全二十巻のうち、第十七巻から第二十巻を明治の実録にあてている。

（3）明治十三年版は、現在のところ芥川文庫のほかには図書館等でもあまり見られないようだが、このほど下巻のみ入手し、大阪市立大学学術情報センターに登録予定である。この下巻の表紙には書肆名が「開成舎」とある。

（4）引用は『芥川龍之介全集』第二巻（第二刷　平一九・二　岩波書店）。以下本稿での芥川作品からの引用は全て同全集（第二

刷）による。

（5）「偸盗」と「今昔物語集」の関係については、須田千里が『芥川龍之介全作品事典』（平一二・六　勉誠出版）の「偸盗」の項にまとめた上、地図も含めた詳細な材源を「『今昔物語集』の内と外」（「解釈と鑑賞」平一九・九）で指摘している。女賊については「今昔物語集」巻二十九「不被知人女盗人語第三」。

（6）出原隆俊「「闇夜」の背後」（「日本近代文学」平七・五）では樋口一葉の「闇夜」における〈女菩薩〉と〈女夜叉〉に関連して、小説からのいくつかの用例を挙げている。

（7）史実では安政七年＝万延元年にあたるか。

（8）タイトルの表記は本により、また同じ本でも表紙題や扉題、内題などの違いにより、「写真廼仇討」とも「写真之仇討」ともなっている。

（9）「開化の殺人」の原稿（川島幸希氏所蔵、秀明大学「飛翔祭」にて平成二十四年十一月に公開）の翻刻紹介に付された小谷瑛輔「芥川龍之介「開化の殺人」完成原稿について」（「東京大学国文学論集」平二六・三）では、この草稿が、芥川の別の未完の作品「未定稿」（「新小説」大九・四）と関連が深く、『芥川龍之介資料集』にある草稿を最初に書き、そこから構想を変更して「開化の殺人」を書き、さらに草稿を生かして改稿したのが作品「未定稿」であろうと推測している。

※本稿は平成二十七年度科学研究費補助金（若手研究B）「〈近代説話〉の研究―明治大正期の実録、実記、講談本から歴史小説、大衆文学へ―」（研究課題番号：25770088）による研究成果の一部です。

※本稿第三節の『開明奇談写真之仇討』のくだりにつきましては、平成二十七年十二月二日、大阪府立大学学術情報センター図書館での〈展観と講演〉「作家の参考書―芥川龍之介を例に―」においてお話した内容をもとにしています。この講演の準備として『開明奇談写真之仇討』その他貴重な図書の閲覧利用をご許可くださいました同図書館、および、講演後にさまざまなご教示を賜りました大阪府立大学の西田正宏先生に記して深謝申し上げます。

（おくの　くみこ・大阪市立大学大学院文学研究科准教授）